

# 米国における次世代支援の今日的課題と世代間アプローチ

—— 地域・学校・家庭をつなぐシステム作りの可能性 ——

中 川 恵 里 子

## Today's Issues of Supporting Youth and Intergenerational Approaches in U.S.A. : The Possibility of Systems Building for Linking Communities, Schools and Homes

ERIKO NAKAGAWA

Today American society has a lot of difficulties in caring youth. The studies of adolescence have revealed that instructive after school programs are really needed for supporting youth. In this point of view, it is considerable that Intergenerational programs have worked for youth at risks by building systems, linking communities, schools and homes since 80's. In this paper, I am going to discuss how to built supporting systems by making reference to one of the case study of Intergenerational programs, "Experience Corps" in Philaderphia. The key-words are "Self-organization", and "Mediator".

- 序
- I 章 システムの「自己組織化」と「仲介的」役割
  - A 「自己組織化」における「仲介者」の役割
  - B S. カウフマンの自己組織化論と「カオスの縁」
- II 章 フィラデルフィアにおける世代間システムの展開
  - A 家庭・地域の変化と次世代育成の今日的課題
  - B 80年代の青少年政策の動向とプログラムの推進
- III 章 小学生の学力支援プログラム「触れ合いコープ」
  - A 「触れ合いコープ」(Experience Corp) の概要
  - B 「触れ合いコープ」の成立と活動
  - C 触れ合いコープのシステム作り
  - D 今後の課題
- 結び 支援システム作りと仲介者の役割
  - A カウフマンの自己組織化論を参考にした考察
  - B 支援システムの発達に関する考察
  - C 結び

序

米国において、80年代の長期経済的不況は、家庭や地域社会の構造を大きく変化させた。その結果、貧困、感情のコントロールや自尊心の低下、学校の出席率などに問題をもつ子供達が増加し、今日、小学生の読み書き学

力の低下、児童虐待、暴力、ドラッグ中毒、自殺、早期の性交渉は、すべての階層の子供達が直面している問題であるといわれている<sup>1)</sup>。

「青少年の健康に関する全米長期的研究2000」(National Longitudinal Study of Adolescent Health)によると、こうした不健全な行動を誘発する要因は、人種、所得、家族構成以上に、「学業上の失敗」と「保護者の監督なしで過ごす時間」が関係しているという。こうした調査に基づき、学業上の失敗を防ぐ具体的な学習支援や、学校後の時間を充実させるアフタースクール・プログラムや地域活動の提供など、より積極的な教育的介入が有効な解決策として問われている。

特に90年代以降、次世代育成環境の改善は、多くの議論と政策上の焦点となりつつあるが、今日、注目すべき動向は、こうした青少年プログラムの実施をめぐる、コミュニティが主導的役割を果たしつつ、学校との協力関係が進展し、地方レベルで自己組織的なシステムが発達してきている点である。このシステム作りの有効な戦略として機能し、コミュニティ再構築に効果をあげているのが世代間アプローチである。

70年代に比較し、約1か月分も長時間化したといわれる成人の労働条件の激化は、PTA、学校ボランティア、

教会やコミュニティ活動など、次世代育成活動からの親世代の撤退を余儀なくし、その結果、青少年の社会的自立に関する地域の大人の役割は大きく後退した<sup>2)</sup>。世代間アプローチは、こうした親世代に代わる主体として、中高年世代の潜在的力を活用し、その社会参加を拓く戦略として、80年代以降は政策的に推進され、社会的支持を拡大してきた。

青少年育成支援においては、地域・学校・家庭が互いに連携しあうシステムをいかに創出するのかが問われるが、米国の世代間事業では、特に大都市近郊で、子供・青少年支援をめぐる地域システム創りの成果が、80年代以降、着実に蓄積されてきているといえる。

本論では、そうしたシステム創りの事例として、ペンシルバニア州フィラデルフィアの世代間事業、「触れ合いコープ」(Experience Corps)の90年代以降の展開を取り上げる。「触れ合いコープ」は、就学時の子供たちの学校生活への適応と読み書き学習をサポートする小学校を拠点とした地域プログラムであり、地域と学校とをつなぐ役割を果たしつつ、コミュニティ再構築に大きく貢献してきた。今日、「触れ合いコープ」は、同地方における成功を基に、全米各地で発展しつつある。

本論では、「触れ合いコープ」プログラムの発達プロセスを分析することを通して、青少年が学力や生活力を高め、生き方を確立することをいかに地域の大人や学校が支援しうるのか、そうしたシステム創りの可能性を明らかにしていく。

なお、ペンシルバニア州フィラデルフィアを取り上げる理由は、世代間モデルの開発、研究、資格付与など、世代間アプローチ推進のリーダー的役割を果たすCIL (The Center for Intergenerational Learning: テンプル大学世代間学習センター) が存在し、1986年の設立以降、「触れ合いコープ」や「アクロス・エイジズ」など、今日、全米モデルとなった多くのプログラムを輩出し、世代間の先進地ともいえるからである。また、同州のピッツバーグ大学には、同じくリーダー的組織であるGT (Generation Together) が存在する。

このように世代間アプローチが当地方で発展した背景はいかなるものであろうか。地場産業として繁栄した自動車産業が80年代に撤退した結果、フィラデルフィア地方のコミュニティ環境は衰退を辿った。親の働く姿ではなく、薬物や飲酒する親をみて育つような子供達が増加し、青少年問題も顕在化してきた。90年代には、コミュニティ政策の推進下、多くのNPOが、地域再生に向けて発達した。フィラデルフィアは、サービス・ラーニング<sup>3)</sup>などの先進的な青少年プログラムが発達した地としても知られるが、そうした理由として、受け皿となるべき組

織的基盤が80年代以降発展したことがあげられよう。今日、フィラデルフィアは、コミュニティ再構築の革新的な成果が目される都市の一つとなっている。

本論の構成は、I章では、本論の視点である、「自己組織化」とそれを促進する「仲介役」に関して、前提とすべきシステム論的解釈を述べる。II章では、80年代以降の世代間プログラムの発展に影響を与えた社会・政策的動向を明らかにする。III章では、就学時の読み書き支援の事例「触れ合いコープ」の活動プロセスを描写する。結びでは、I章の理論的解釈を用い、III章のプログラムの展開過程について分析を試みる。

## I章 システムの「自己組織化」と「仲介的」役割

### A 「自己組織化」における「仲介者」の役割

本論では、組織や個人の発達を、「自己組織化」(self-organization)のプロセスにみる。そして、それを促すのが、「仲介者」(mediator)の役割であるとする。自己組織化の一般的意味は、コンサイス英和辞典によると、「自立形成」、或いは、「自己組織の構造を自分自身のメカニズムによって構成すること」とある。システムとは、一般的に、各部分が有機的につながり、ある目的を果たすべく協働することであると説明されるが、自己組織性とは、そうしたシステムの働きを、システム内部から、つまり、構成要素(部分)である活動の主体側にとって説明している言葉であるといえる。したがって、自己組織性とは、外部からの指令によるのではなく、活動システムの内側からメカニズム(秩序やルール、そして方向性)を生み出していくことと言い換えることができる。

しかしながら、例えば、とりわけ思春期青少年が、今現在の足元に捕われ、揺れ動き、将来の方向性が見出せない悩みを抱くように、当事者にとって、活動の仕組みを理解し、方向性を見出すことは易しいことではない。そのためには、活動を客観的に捉え、経験を自己評価し、社会との関わりを通して自己調整していくプロセスが問われる。世代間アプローチにおいては、青少年と大人社会との間にあって、青少年のそうした自己調整のプロセスにつきあい、自立をサポートする「仲介役」を果たすのが、人生の先達ともいえる中高年世代である。彼らは、すでに世の中を十分知っているが、社会から一線を退いた自由な身分であるという意味で、青少年を理解し、その社会的調整をサポートするのに見晴らしのいい場(大人社会と、青少年の立場とを両方見渡せる境界点)に位置しているのである。これが、中高年世代が、青少年の自立をサポートするのに適しているという、世代間アプローチのもつ積極的な意味あいであるといえよう。

しかしながら、こうした仲介役への注目、発達論的

意味のみならず、組織論などでも議論の焦点となっている。佐藤一子は、その著「子供が育つ地域社会」において、川崎市の事例をあげながら、学区への地域住民参加の今後の可能性を握る鍵として、事務局機能を支援する仲介組織のあり方について述べている<sup>4)</sup>。筆者も、サポートセンター(米国)など、NPOを支援するNPOの仲介的役割(intermediate)に関して分析を試みている。その結果、仲介的組織は、行政と民間、或は社会と個人との間にあって、社会資本や情報を流通させ、地域社会計画とも呼べるべき秩序と方向性を生み出す拠点として機能していることを見出した<sup>5)</sup>。

## B S.カウフマンの自己組織化理論と「カオスの縁」

こうした仲介組織(者)の役割は、システム論にいかん位置づくのであろうか。S.カウフマンの「自己組織化と進化の論理: At Home in The Universe: The Search for Laws of Self-Organization and Complexity (1994)」<sup>6)</sup>(生態、経済・社会システムなどに共通する一般論理)を参考にすると、自己組織化を進め、秩序を生み出す進化(発達)の拠点として、彼は、「カオスの縁(ふち): カオスと秩序の境の相転移点(釣り合いのとれた平衡点)」というものに注目する。この「カオスの縁」で生み出される現象が、まさしく仲介組織の果たしている役割に相当することが予想される。カウフマンは、この「カオスの縁」に関して、次のように論じている。

「…システムは自らを安定なカオスの縁に向かわせていく。…カオスの縁は、民主主義の論理についても、新たな理解の仕方を与えてくれる。…人々は共同社会に組織され、社会はその利益のために活動し、互いに拮抗する利益の妥協点を求めて運用がなされる。こうした一見でたらめな過程にも、安易な妥協が早急になされるような秩序状態、全く妥協点が決められないカオスの状態、いつかは妥協が達成される相転移点のような状態がみられる。最良の妥協は、“秩序とカオスの境の相転移点”においてなされる。こうした事実は、多元的な社会を擁護する重要な妥協であり、適応的な妥協を得るための自然な手続きとして、民主主義が存在している。」<sup>7)</sup>

多様な問題が絡み合う複雑な関係性の中で、社会と調和した発展はいかに調整しうるのであるか。「カオスの縁」とは、そうした調整の拠点であり、秩序とカオスが調和するよう、状況にあわせて手探りで調整しえた妥協点とも言える。それでは、仲介者の役割が、「カオスの縁」の機能に相当するならば、いかに個々のメンバーをサポートすれば自己組織化を促進しうるのであるか。彼が進化論や熱力学などを用いつつ論じる「カオスの縁」の性質は、具体的支援の在り方を示唆している。要約すると、秩序を求めな

がらも、完全な秩序状態に安定してしまわず、その時の状況に応じながら、常にピーク(最適状態)を追い続ける動きの中にこそ、自己組織化支援の鍵があるということになる。こうしたカウフマンの議論を基に、ここでは、次章以降の実践分析に向けて、仲介者の役割について、筆者がノウハウ的に応用した結果だけを以下に提示する。

- ① 仲介者は、メンバーが社会に適応し、その自己組織化を助けるだけでなく、それらが進化しうる社会構造自体を作る。ゆえに、社会の再構造化と進化を促す拠点ともいえる。
- ② 仲介者は、全体利益を考慮するより、部分とその連携に配慮する必要がある。メンバーの協調関係やサブシステム等の部分組織作り(部分分けが重要)、受け手本意の支援を心がける方が、結果として全体の発展を促す効果がある。
- ③ 仲介者自身は安定した秩序に身をおかず、秩序とカオスの境界でバランスを取る拠点(カオスの縁)として働くことで、その時々に応じた全体・社会的秩序を生み出しうる。
- ④ まばらに結合したネットワークは秩序に、密に結合したそれはカオスに向かう。秩序があり、安定かつ柔軟なのは、秩序とカオスの境でネットワークが平衡を保っている場合。
- ⑤ 仲介者は、常に全員を喜ばそうとすべきではない。しかし、すべての人に一度は注意を向けること。誰を無視するかは、毎回、検討し直し、変化させる必要がある。
- ⑥ 効果的なサポートのためには、支援者や適応する環境と、支援される側との間に、ある程度の共通性が存在することが必要になる。  
一方、この「カオスの縁」は、青少年の支援者の役割についても興味深い示唆を与えてくれる。P. Van Geert (2003)は、発達を捉えるには2方向の見方があるという<sup>8)</sup>。一つは、レトロ理論であり、もう一つは、プロスペクト理論である。前者は、回顧に基づき(結果から)発達を捉え、後者は、始めの状態におけるメカニズムの見方に基き、発達をオープン・プロセスとして捉える未来展望の見方である。大人と青少年の価値観のギャップとは、いわば、両見方のギャップに相当するといえないだろうか。青少年の抱える揺らぎは、先が読めない不安、つまり未来展望におけるカオスの状態ともいえる。一方、大人社会の規範は、次世代にとればレトロスペクティブな秩序にあたる。青少年支援に必要なことは、両見方を状況に応じて緩やかに繋いでいく「カオスの縁」の働きではなかろうか。したがって、支援者は、レトロな位置

に身をおきながらも、いかにプロスペクティブな見方を理解し、両者を結ぶべく寄り添っていくのが問われよう。その具体的な在り方を示唆しているのが、「カオスの縁」の機能といえる。

青少年の社会的自立とは、社会との関係を通して、彼ら自身で主体的に生き方のメカニズムを生み出していき、自己組織化の個人的過程と捉えうる。こうした青少年個人の、或は、その支援システムの自己組織化を促進する仲介役の在り方について、本章では、不十分ではあるが、カウフマンの議論を紹介した。次章では、世代間システムがいかに自己組織的に発展してきたのか、フィラデルフィアにおける80年代以降の歴史的展開過程を次世代政策の動向を踏まえつつ検討する。

## II章 フィラデルフィアにおける世代間システムの展開

### A 家庭・地域の変化と次世代育成の今日的課題

#### 1) 地域社会と家庭の変容

80年代にフィラデルフィア郊外を調査したW.ウィルソンは、青少年に家庭像と社会人としての役割規範モデルを提供しうる中流の人々が地域から姿を消し、青少年が健全に育つための社会的資本が枯渇する一方で、地域社会に残る低所得層の大人の地位や影響力も低下していることを明らかにした<sup>9)</sup>。

こうした大人達を、E.アンダーソンは“The Old Heads”(長老)と呼び、伝統的コミュニティの安定に不可欠な存在として描いている。その役割は、青少年に社会的規範を教え、雇用に繋がる人物と接触させるなど、地域と外社会との「橋渡し」として若者の自立を促すことであった。彼はこうした役割が衰退したのは、彼らの伝統文化が若い世代には無益になったことや都市郊外の治安の悪化が原因であると論じている<sup>10)</sup>。

このような状況下、働く大人の姿を知らず、薬物や飲酒する大人をみて成長するような青少年達もでてきたのである。

一方、家庭も大きく変容した。両親共にフルタイムで働いて生計がなりたつような経済状況が80年代以降定着したと同時に、労働時間の大幅な延長は、子供たちが親の監督なしに過ごす時間の問題を引きおこした。また、成人の3人に1人が介護の必要な高齢者を抱えているという高齢化も、子供へのケアを時間的・経済的に圧迫している。加えて、公的保育制度の遅れは、就学前の子供のデイケアにかかる経済的負担を重くしている<sup>11)</sup>。学童の場合、議論の焦点は帰宅後の時間の問題である。健全な育ちのために、家族と共有する時間の質(Quality of Time)が議論されるものの、調査によると、平均5時間半も誰の監督も受けず、その間、社会的な関係を求める

より、メディアに浸りがちな傾向が指摘されている<sup>12)</sup>。

#### 2) 青少年の問題と学業支援

子供の貧困化は80年代から深刻化し、家庭からのストレス、感情のコントロール、学校出席率に問題を持ち、自分に価値がないと感じている例が多いといわれる。「子供保護基金年鑑2000」(Children's Defence Fund yearbook 2000)が指摘する今日の子供の問題は、

- ・読みの学力が水準レベル以下の小学4年生は70%もいる。
- ・280万の子供が虐待または放置されている疑いがある。
- ・10人の子供が、毎日、撃たれて死亡している。

また、「思春期の健康に関する全米長期的研究2000」(National Longitudinal Study of Adolenscent Health)によると、約1/4の10代が武器を持ち、10%が週に一度は飲酒する、そして、「学業上の失敗」と「保護者の監督なしで過ごす時間」という2つの要因は、人種、所得、家族構成以上に、青少年の不健全な行動を誘発する原因となっているという。

以上の調査報告が示唆することは、青少年の今日的課題を改善するためには、学業上の失敗を防ぐ具体的な学習支援の在り方や、放課後を充実させる、質の高いアフタースクール・プログラムやコミュニティ活動など、積極的な教育的介入が必要だということだ。こうした課題を受けて、特に、90年代半ば以降の世代間アプローチは、学校を拠点に発展したといえるが、従来の学校ボランティアと異なる点は、世代間サービス・ラーニングの例にみられるように、学校に協力するというより、学校の教育内容に地域が主体的に関わるような連携のとり方が進展したことである。それでは、こうした展開は、いかなる政策上の動向の下で可能になったのであろうか。

### B 80年代の青少年政策の動向とプログラムの推進

フィラデルフィアを擁するペンシルバニア州では、1985年の世代間教育ボランティアネットワーク条例、1989年の子供のためのケア条例などの連邦政府レベルの政策的動向を受けて、州エイジング行政局は世代間ネットワーク作りを促進し、世代間プログラムの発展を図った。GT (Generation Together) は、1984年に同州の子供と高齢者のケアを結ぶ「子供ケアをめざす世代間プログラム」を促進したが、これによって、60以上の世代間モデルが作られ、子供ケアセンター、ヘッド・スタート・プログラム、高齢者施設、そして老人ホームなどの協働が進展した<sup>13)</sup>。また、同1984年、高齢者センター、ボランティア・プログラム、公私立の子供デイケア施設、公立学校などの代表からなるエリー・コミュニティ活動センターがGTを拠点に成立し、当センターは、90年代には世

代間ネットワークへと拡大する。1985年には、州知事R. ソーンバークが、子供のケア向上にむけて、シニア市民の参加を促す公的声明を行ない、エイジング、社会福祉、教育分野の提携促進を図った。翌1986年には、フィラデルフィア財団の基金を得て、CIL(テンプル大学世代間学習センター)が創立された。同1986年、世代間協調政策を促進する唯一の全米組織であるGU (Generation United)が設立された。こうした専門組織の成立を基に、世代間事業は大きく発展する基盤を得たのであった<sup>14)</sup>。1987年には、世代間教育を学校教育制度に導入するためのプログラムの見直しが州議会で締結された。翌1988年には、R. ケーシー州知事が州職員の子供のデイケアセンター設立に際して、世代間モデルを奨励した<sup>15)</sup>。

90年代に入ると、1991年の全米コミュニティ・サービス条例、1992年の全米メンター・コープス条例、1995年のWCOA(ホワイトハウス・エイジング会議)など、世代間推進に関する連邦政府レベルの動きが顕著になった。特に、1995年のWCOAでは、高齢者が青少年のために力と影響力を使うよう求める声明がクリントン大統領によってなされ、ボランティア団体の育成が審議された。また、同大統領(1990)は、社会政策としてメンタリングを推進するよう提起している<sup>16)</sup>。

公共政策と提携し、課題解決型へと移行する、世代間アプローチの80年代の発展は、立法に働き掛けることで政策と実施団体とを結ぶ、GUの仲介的働きに負うところが大きい<sup>17)</sup>。この世代間全米組織であるGUの援助下、世代間推進のリーダー役を果たすのが、ピッツバーグ大学のGTやテンプル大学のCILなどの大学関連組織である。こうした組織では、専門家が中心となり、プログラムの方向性を決定し、情報発信、研究の蓄積、実践者研修、テキスト制作、評価研究、団体間ネットワークの促進、資格付与などを実施している。

例えば、2000年以降の方向性に関していえば、GTは、その中心的テーマを、家庭問題からコミュニティ政策やサービス・ラーニングなどへと移し<sup>18)</sup>、CILでは、メンタリングなど、学校拠点の青少年個別支援型プログラムの重点化を図る<sup>19)</sup>。どちらも、学校との連携を強める方向へとシフトしているといえるが、伝統的の学校ボランティアなどと異なる点は、学校の補完ではなく、自立的なコミュニティ事業として、対等の立場で学校と協働するアプローチを促進する点である。そうした場合、学校は協力者としての役割を果たす。

以上のように、フィラデルフィアにおける世代間システムの発展は、コミュニティが内包する歴史・社会的背景に加え、世代間専門的全米組織であるGU、その支援下で、団体支援とそのネットワークを促進する大学組織の

GTやCIL等、全米～地方レベルに至る仲介的支援体制が、世代間の社会的支持の拡大と相互しつつ重層的に発展してきたことと関係する。こうした仲介組織によって、プログラムの運動的広がりや政策とが結び合い、情報や資源が有機的に循環する中で、その具体的方向性が調整されてきたといえよう。

つまり、以上の展開は、最初から全体的ビジョンに基づき具現化したのではなく、行政と民間、全米と地方、そして団体間の連携が仲介組織を拠点に発展した中から創出されてきたといえる。仲介組織の具体的機能に関する詳細は紙幅の関係上、後の課題としたい。

### III章 小学生の学力支援プログラム「触れ合いコープ」

#### A 「触れ合いコープ」(Experience Corp)の概要

貧困家庭の新小学生が、学校生活に適応し、学業につまずかないよう出発を助ける試みには、地域の親が指導することで知られる伝統的なヘッド・スタート事業がある。今日、全米各地のヘッド・スタート・センターでは、シニア・ボランティアによる世代間ヘッド・スタートが一般的になりつつある。

本章では、フィラデルフィアで誕生し、全米モデルへと発展した、読み書き支援のための世代間プログラム「触れ合いコープ」のフィラデルフィアにおける発展過程を取り上げる。

西フィラデルフィアのアライン・ロック小学校では、最上階の日当たりの良い部屋が、「触れ合いコープ」に用意されてある。ここでは、チューター役をシニア・ボランティアが果たし、主にアフリカ系低学年の読み書きを支援する。同学校が採用した「触れ合いコープ」は、全米シニアサービスコープ(National Senior Service Corp)や全米サービスコーポレーション(Corporation for National Service)が基金を出し、教育、子供の発達、老年学などの研究に基づき、1986年にCILによって開発された、革新的な世代間モデルとして知られる。

世代間の緊張が強調される中、シニアが青少年に関わることが、コミュニティ再構築に役立つという認識が広がった80年代以降、世代間事業は、地方の学校教育行政と連携しつつ、コミュニティ・サービス組織によって主導されてきた。「触れ合いコープ」も、こうした地域主導型事業として、学校から自立的な立場で活動が可能であるといわれる。財源は、CILや退職者プログラム(RSPV)等の協賛を得て、通常、費用の1/3と施設・設備は学校側が提供する。このように、コミュニティが主導し、学校が協力する形をとるが、学校側の協力の程度は学校長の理解にかかっているといわれる。

教育予算の削減や教員不足など、教育環境の危機が叫

ばれる中で、「触れ合いコープ」は小学校が子供を惹きつける場となるようにと、個々の子供に安定して信頼のおけるケアを提供することに配慮してきた。その結果、1995年には、全米10都市で、幼稚園～3年生の読み書き支援が実施され、1999年には、フィラデルフィアにおける参加は10校に拡大した。

このプログラムの特徴とは、①潜在的な地域資源への注目、②きめ細かなサービス、③インパクトをもつクリエイティブなボランティアの存在、④リーダーとボランティアの育成、⑤学校と地域とのチーム・コンセプト、などであるとされる<sup>20)</sup>。

## B 「触れ合いコープ」の成立と活動<sup>21)</sup>

### 1) プログラムの成立

プログラム計画時、同小学校は他の公立学校と同様、地域における公立学校の役割を模索していた。教育予算の削減と教員不足という1980年代の状況下、地域支援の獲得は学校にとって重要な課題であった。まず考案されたのは、学校に退職者を受け入れるプログラムである。彼らは、パソコン室や図書室で父兄を手伝い、アフター・スクール・プログラムのアシスタントとして活動し始めた。学校とボランティア側が合意し、読み書き支援という目標が決定したのは、その翌年であった。

### 2) 対象となる子供たち

対象となる一年生は、貧困地域の出身が多く、彼らにとってボランティアは、信頼のおける恒常的な存在である。教職員たちは、確信に満ち、信頼のおけるボランティア達は、学校外の世界は子供たちに好意的であることを示す役割モデルであるという。「シニアは礼儀正しきや社会的スキルを重んじます。子供は彼らのようになりたいと思うんです。」と彼らが学校の雰囲気を与える影響を、学校関係者は高く評価する。シニア側は、「一年生は、学校って何か、そのショックに対応する準備ができていない。母親が学校への準備をしてやらない場合、抱きしめて注意を払ってくれる誰かを学校で見つけると、子供は安心するんです。」「社会の底辺の子供達にとって、このプログラムによってクラスで注目されるのはすごいことです。子供たちの自尊心を向上させることができるんです。」このように、プログラムは学力や社会的スキルに加え、親に代わるケアを提供することで、就学時の子供が学校環境に適應するのを支えるといえる。

### 3) リタラシー活動

ボランティアの65%がアフリカ系女性であり、世代間リタラシーは女性の役割という暗黙の仮定がある。アフリカ系女性といえば、50年代の民権運動以来、伝統的にそのリーダー性で知られる。或はOld Headsの伝統的役

割が、こうしたプログラムを通してその役目を果たし続けているともいえる。

リタラシー活動では、ポップ・アップ絵本の朗読、お話し絵という楽しい方法が工夫されている。この方法を開発したチューターは、「去年は27回お話し絵をしました。子供は自分で描いた物語を忘れないし、私の方は、絵で、彼らの考え方や潜在的才能を見つけ出すことができます。」と語る。中には、子供の進歩を毎日記録する者もいる。週15～20時間程度の学校でのチューター活動の他、クラス旅行や学校行事に同伴したり、アフター・スクール・プログラムを手伝う場合もある。

## C 触れ合いコープのシステム作り

1995年にフィラデルフィアの2つの小学校で、「触れ合いコープ」を立ち上げたプログラム・ディレクターのR. ティーゼは、「小さくやるのがコツ」だという。彼の当時の計画ノートからは、組織作りの複雑な次元が伝わってくる。システム作りに際して、彼が留意したという3つの 이슈は、ニーズ、資源、そして各学校の倫理的特性である。こうした複雑な次元に対応すべく彼が採用した方法は、ディレクターを責任者とし、ボランティアや大学院生を含む各チームがチーム単位で活動するという、チーム・アプローチである。彼は、「学校で、子供と高齢者とを一緒にすることは容易でなく、一元的には進まない。…ボランティアの募集、訓練、学校との連携など、同時にいろいろなことが進行する。」という。しかし、一般的に、そのプロセスは、①パートナー校の特定、②ボランティアの募集、③ボランティアの訓練、④活動、⑤評価とその査定、の順で進行するとされる<sup>22)</sup>。

### ① パートナーと校そのニーズの特定化

パートナー校とそのニーズを特定化することは、システム作りを左右する重要な事項である。そのポイントは、プログラムの目的と学校側の役割について明確なビジョンを発展させるべく話し合い、「是非やりたい」という態度を創ること、交渉に難航した場合の外部のファシリテータによる支援、予期せぬ出来事への予見と柔軟性などであるという。そして、学校とボランティアとの関係をうまく進展させるためには、共有できる点を合理的に発展させる必要があり、そのためには、いかに教員が関わるのかを明確にするような質問をするのがコツだという。こうして、学校側のニーズが明確になると、プログラムの論理的見解が作動するようになる<sup>23)</sup>。

### ② ボランティアの募集

特に、給付金に関する情報は、潜在的なボランティアの参加を可能にし、多様な階層の社会参加を図る意味で重要とされる。給付は、週に15時間の活動で月に200ドル

ほどで、交通費やお昼代を満たす程度である。効果的な募集は、いかに学校や子供たちから必要とされているのかを、ボランティア自身が訴えることであるという。

エリクソンの「世代性」の考え方(1968)にもあるように、「次世代に必要とされているという感覚は、シニアを動かす一番の動機になる。」のである。加えて、ティーゼが提案するのは、子供や孫を思い描かせて、暖かい記憶や受容の感覚を呼び起こすという情動に訴える方法である<sup>24)</sup>。こうした情的作用は、動きを起し、かつ持続させる、システム構築の原動力といえるようである。

### ③ ボランティアの訓練

ボランティアと学校スタッフとのチーム作りは、システム作りの焦点である。学校側がプログラムのリズムを学ぶのに2~3年かかるように、スポンサー組織から支援を取り付けるのにも同様の年月が必要とされる。このように、多様な関係組織が共振し合い、一つの活動システムとして働くには、かなりの年月を要するが、その鍵は、多様な組織を結び、調整役として働く、コミュニティ側リーダーにあるといわれる。

ボランティアは、5日程度の事前訓練を受けるが、リタラシーに関する指導はそのうちの7~9時間程度である。一方、重きがおかれているのは、繰り返しの中での訓練、つまり、サービス内訓練(in-service training)であり、年に数回、ワークショップ形式で実施される。その主なテーマは、子供の発達、リタラシー、学校組織とシステム、アカウントビリティの問題(何をカウンセラーに回すべきかなど)、チームワーク作り等である。中には、革新的な指導モデルを自ら開発し、訓練を実施している都市もある。特に有益だといわれるのは、公共図書館の子供専門の司書によるプレゼンテーションであり、図書館情報やアフター・スクール活動、宿題の手伝い、夏季お話プログラム、本を使ったりリタラシー技術、物語の筋道に関するコンセプト、読み書きスキルと発達の関係等について、司書と参加者とで対話する機会が設けられている。

一方、教員側とボランティア側と別々に実施されるワークショップは、相互に抱くステレオタイプを打破する効果が認められている。その後合流することで、教員側は、シニアのもつ力とは何かを理解し、ボランティア側は、教員がプログラムに何を期待しているのかを学ぶといわれる。

月ごとのセッションでは、新ボランティアは、先輩から、若い教員と協働し、今時の子供に対応するための心構えや秘訣を伝授される。ストーリー・テラーとして有能な先輩の一人は、「時々、私が思うことは、私の相手は本当に子供なのかしらと。学びたくない天使には忍耐を

持ち、ゲームなどちょっとしたやり方をみつけましょう。」と語り掛け、日常の活動について、共に内省する機会をもつ必要性を訴える。ティーゼによると、「メンバーは、彼らの挑戦に幻想を抱いてはいない。感傷ではなく、彼らが齎すのは愛と誠実さである。」という。活動を通じた訓練では、「スキル強化」と「目標の明確化」が図られる。新メンバーは、こうした経験を重ねつつ、活動のリズムを体得し、「彼ら自身の先生になっていく」のである<sup>25)</sup>。

### ④ 活動

ボランティアは、通常、始業前に4、5人の子供たちにチューターを実施する。教員の役割は、子供たちのローテーションをアレンジすることである。学校行事は、プログラムに優先され、ボランティアも子供たちに同伴して参加する。そうした体験を子供と話し合うことで、彼らのコミュニケーション・スキルを高め、行動や興味を把握するのである。保護者会に出席を勧める教員もいる。しかし、ボランティアは特定の子供に関わるだけでなく、人生経験を学校全体のリタラシー環境の向上に役立てるよう潜在的機会に常に目を開いているという。また、興味深い活動としては、プログラム時間外に、遊びを組み立て、野外活動で問題解決能力を高めたり、そうした体験を詩や絵画で表現し、体験を振り返る機会や、安全で楽しい遊び場作りのアイデアを子供ら自身で考えるブレインストーミングの機会がある。加えて、コミュニティ集会上に、ボランティアが学校代表を委任される例もある。

最も大きな挑戦といえるのは、学校活動に子供の家族が関心をもつよう彼らの参加を促すことである。例えば、朝食会を開き、無料の本や教材、食事を用意し、親や地域の人々を招いて、学校や子供の育成環境への関心を育む機会を設定している。この催しは、教員やボランティアが好む割には家族の参加が少ないが、プログラムに対するコミュニティ側の評価を高め、次年度の予算獲得に有利に働く効果が認められている<sup>26)</sup>。

### ⑤ 評価とその査定

評価は、組織が秩序や方向性を生み出していく自己組織化に不可欠なプロセスといえる。共通目標(ビジョン)の確認は、ボランティア同士、そしてボランティアと学校関係者との協力関係を維持する上で重要であるが、そうした目標がどの程度達成されたかを確認し、新たなレベル達成に向けて活動の方向性を改善するような評価尺度の必要性が認識されている。

触れ合いコープは、学校関係者や父兄、そして子供たちから熱狂的な支持を得てきた。学校関係者は、一貫性に富む、責任ある支援をプログラムが提供しうる点を評価する。「触れ合いコープは一日たりともさぼらない堅実な人材を提供してくれる。」と。しかし、普及するにつれ、

その目標は、リタラシーの質の問題に移行している。読み聞かせを楽しむだけでなく、そこからえた情緒的、認知的、そしてアカデミックな利益を、いかに読み書きスキルの向上につなげていくのか、それには、注意深く制御された評価研究が必要であるといわれる。例えば、子供の変化するニーズに対応する個別的レッスンプランと、個別的評価モデルを開発した都市もある。フィラデルフィアでは、ボランティアは形成的 (formative) 評価に従事し、個々の子供の課題について観察記録を作成し、彼らにあった改良プラン作りに役立てている。

学校側は、その費用の一部を提供することからも、効果を評価する具体的な方法を要求する。しかしながら、プログラムの恩恵を一番感じているのは教員であるといわれる。ケアが必要な一部の子供たちから解放され、その子にあった個別支援が得られるからである。「個別支援の良い点は情緒的満足を与えてやれることです。問題のある子が、挑戦し続ける自信をもらえるのです。」「子供たちはチューターから帰ってくると、満足し注意力が増しているんです。」こうした情緒的效果に加え、教員が一番評価するのは、言語発達への貢献である。「子供たちは話すことを必要としています。ところが、クラスでは、そうした子ほど機会を提供しても参加しない。しかし、チューターとゲームし会話するうちに、クラスで話す準備ができてくるようです。」加えて、ボランティアが学校全体に礼儀を重んじる雰囲気を作ることあげる。子供たちは、高齢者のニーズに注意し、椅子を引き、彼らを待ち、階段をゆっくり下るようになるという。「お年寄り優しいし、いろいろ知ってるよ。」と、「お年寄り」についての認識を新たにした2年生がいる。一方、自分にとっての特別な誰かとして、チューターのAさんを誇りにしている一年生もいる<sup>27)</sup>。

このように、読み書きスキルに関する具体的評価方法へのニーズが高まりつつある一方で、情緒的效果、対話の機会、学校文化への影響、エイジングへの理解と配慮など、客観的尺度では推し量れない成果が支持を得ている。こうした効果は、子供たちの意識や文化の向上に関与し、より長期的な教育効果につながるものといえよう。

## D 今後の課題

### 1) プログラムの拡張とチーム・アプローチ

学校開校時、週末、そして夏休みへと大幅な拡張をめざし、プログラムの質的、量的発展が図られている。これまで検討してきたように、子供へのケアと配慮、教員へのサポート、学校の雰囲気作りなど、公教育のニーズに応える触れ合いコープのもつ潜在力は大きい。しかし、拡張するにつれ、官僚的になり、そのよさを失う危険性

も指摘されている。たとえ、学校や地域に好都合だとしても、ティーゼがいう「小さくやる」モデルを強調する意見もある。プログラムが、これまでホールマークとしてきた親密性、ケア、個別的質を維持しつつ、拡張することはいかに可能だろうか。更なる検討が求められている<sup>28)</sup>。

### 2) 家庭・地域への拡張

より革新的な課題は、プログラムの家庭への拡張であり、チームを子供の家庭に派遣し、子供と共に親のリタラシーを支援するという試みが開始されている。こうした親子への取り組みは、世代間ヘッドスタート・プログラムなどでも実施されており、3世代型アプローチともいえる今日的課題の一つである。

V.ガッツデンは、親のリタラシーが、いかに子供のそれに影響を与えるのか、親子の複合的学習形態に関する議論の必要性を指摘する<sup>29)</sup>。しかし、読み書きスキルの取得以上に重要といえるのは、リタラシーを媒介に、家庭や地域の教育への関心と参加を促すことではなかろうか。1年生への読み書き支援の効果は、青少年の持続的な学力向上にいかに作用するのだろうか。類似する事業として60年代から続くヘッドスタート・プログラムがある<sup>30)</sup>。この事業における調査では、貧困階層の子供を対象とした就学時の学力支援の効果は長続きせず、4年次には非参加者との差はなくなることが明らかにされた。そこで、持続的効果のために開発された戦略が、親を地域の子供の指導員として育成し、家庭や地域という環境全体の教育意識の向上を図る試みである。ここでは、フィードバックしあう学びの循環を、家庭や地域社会が自ら創出しようとするような、自己組織的なシステム自体の育成が図られたのである。

触れ合いコープの場合も、「朝食会」のように、子供の読み書きスキルを媒介としながら、家庭や地域の教育への関心を育てることに挑戦している。家庭からの参加は今一つといわれるが、チームが家庭に出向き親を支援する拡張事業は、読み書きスキルの向上を越える効果を予想させるものといえよう。

### 3) ボランティア育成の課題

ボランティア育成は最も重要な課題である。現状分析では、事前訓練よりも、具体的な活動を通して「彼ら自身の先生になる」、つまり、システムを担う主体となるプロセスが見出された。しかし、指導や定型的なモデルが必要であるとの見方もある。例えば、指導に関しては、チーム・リーダーやコーディネーターなどの指導的役割への期待が高い。また、良くデザインされたモデルは、チームの努力を集中させ、子供の進歩を測る方法理解に役立ち、活動を活性化する効果が認められている。とは



いえ、集中的訓練や指揮はシニアにはストレスになりがちなこと、単一の戦略や哲学への固執は、特に柔軟な対応が必要な場合、避けた方がよいことが知られている。例えば、チューターが必要な生徒を選ぶのにも、定期的に見直す柔軟な姿勢が求められているのである<sup>31)</sup>。

以上のことから、ボランティアの育成は、活動を通じた訓練が柱といえる。しかし、支援的役割への期待は高い。例えば、安定して恒常的なサポートを提供する点では、シニアは本質的な適性をもつ。しかし、リタラシーの質が問われる今日、効果を適切に評価し、従来の（大学などで開発された）モデルを、個々の子供に合うよう改良していくオープンな思考と柔軟な姿勢も欠かせない。したがって、安定性と柔軟性のバランスをいかにとるのが個々のボランティアに求められている。そのため、彼らの活動をモニターし、モデルを改善するための指導的役割が必要となるが、こうしたコーディネーター役は、子供だけでなく、シニアの特性にも配慮しつつ、調整を心掛ける必要がある。したがって、ボランティア・リーダーのように、活動内部から創出される必要が認識されている。

以上、組織の構造、つまり運営の具体的ノウハウや方向性、そして指導者は、ボランティアと学校関係者との相互活動のメカニズムの中から創出されてくる過程が見出された。

### 結び：支援システム作りと仲介者の役割

本章では、1章の自己組織化理論を参考に、2章と3章で論じたプログラム成立の社会・政策的背景と「触れ合いコープ」の展開について、学校、地域、家庭をつなぐ支援システムがいかに形成されたのか、「自己組織化」と「仲介者の役割」に注目しつつ考察する。加えて、青少年支援における「仲介役」としてのシニアの役割とその可能性について言及する。

#### A カウフマンの自己組織化論を参考にした考察

まず、1章で「仲介者の役割」として取り上げた①～⑥の機能を、「触れ合いコープ」の事例に即して検討する。

- ① ボランティアは、一年生がクラスで学べるよう、橋渡しとして働き、学校への適応を助けるが、それだけでなく、彼らが適応しやすいような学校作りに貢献する。結果として、学校文化や組織自体の改善につながっていることは、学校関係者による評価によって確認することが可能である。
- ② 子供本位の支援を実施していることは、記録をつけて常に改善を目指すボランティアの姿勢や、「子供にあったやり方をみつけましょう。」などという先輩ボ

ランティアによる提案から読み取ることができる。

一方、組織レベルでは、チーム・アプローチは、教員側、ボランティア側というサブシステムとして機能し、各々の立場での意見や要求を明確にした上で、協働するための共通のビジョンを構築するのに有益であることが見出された。

今後の課題であるプログラムの拡張に関しては、柔軟性、恒常性、暖かさ等のこれまでの長所を維持するために、小規模を強調する意見もある。しかし、こうした長所を維持しつつ拡張が可能であるとすれば、チーム・アプローチが鍵となるであろう。つまり、全体を大きくするのではなく、サブシステム（チームの作り方）とその連携の作り方を工夫し、調整的役割を果たす仲介役のあり方を充実させる方向である。

- ③ 一年生支援の鍵は、安定性と柔軟性のバランスにあるということであった。例えば、リタラシーの効果を計る客観的評価の必要性が指摘される一方で、一つの理論やモデルに安住する事を警戒する意見もある。そうした意味で、形成的評価（子供の発達記録）は、個々の子供に合わせた支援のリズムを生み出すための有効な方法として注目してよいといえよう。
- ④ 「触れ合いコープ」は、多様な組織の連携によって成立しているが、いかなるネットワークを作るかは、拠点とする学校の規模やニーズに合わせた作りが問われるといえる。
- ⑤ 担当する数人の子供達にチューターを実施するのがボランティアの基本的仕事である。しかし、支援が必要な子供を常に見直すというやり方で、学校全体のリタラシー環境に配慮する姿勢が伺われる。
- ⑥ アフリカ系の子供の支援者として、アフリカ系シニアが適しているという戦略の有効性が知られている。この経験に基く戦略は、適応すべき学校環境と子供の生育環境や文化に隔たりがある場合、橋渡し役は、子供と何かしらの共有点をもつ必要性を示唆している。また、組織論的問題としては、学校とボランティア側との協働関係作りの戦略として、共有できる点を合理的に発展させる対話—例えばいかに教員が関わるのかを明確にする対話—の有効性が認められている。

#### B 支援システムの発達に関する考察

地域と学校、ボランティアと教職員、シニアと1年生という、通常は接点をもちにくい異質の者同士を結び、安定した支援システムとして維持、発展させることは、トップダウン式の一元的システムでは予想もつかない複雑さへの柔軟な対応が求められることが、「触れ合いコープ」の展開過程の分析により明らかになった。例え

ば、青少年に対しては、安定して恒常的で、相手本意のサービスを心掛ける一方で、支援者側自身は、安定を求めず、状況に応じて妥協策を見出していくという姿勢が必要になる。それは、多様な関係者同士の連携を促し、かつそれらの動きのバランスを調整していく中から、よりよい方向性を手探りで把握していくダイナミックな作業といえる。触れ合いコープの実践では、地域側リーダーが調整役となり、チーム・アプローチが機能することでそれが可能になっていた。また、世代間アプローチを適用する際の利点であり、かつ難しさであるのは、活動推進の原動力はシニアからでていることである。青少年に配慮することはいうまでもなく、シニアを如何に活かすのか、それを一番心得ているのは、シニア側のリーダーなのである。システム促進の中心者が、ティーゼを始めとするシニア・リーダーたちであるのは、こうした理由で注目すべき事項といえよう。

一方、触れ合いコープが機能する基盤として、世代間アプローチを促進する社会的・政策的動向に触れる必要がある。2章の社会・政策的背景の分析から明らかになったことは、全米レベルの世代間専門組織であるGUが、プログラムの運動的動きと立法・政策的動きをつなぐメタレベルの仲介的機能を果たしていること、そうしたGUの支援下で、GTやCILなどの大学関連組織が、プログラムの開発や研究、関連組織間ネットワーク作りなど、プログラムや実施団体レベルへの具体的支援を行うという、重層的な支援システムが発達している点である。

こうしたシステムが機能する地域的基盤として、フィラデルフィア地方は、80年代を地域変革の時代として、革新的なコミュニティ政策の推進下、NPOなどが広範に発達するに至った。こうして、プログラムの受け皿となるべき社会的基盤が形成されてきたことに加えて、黒人コミュニティが内包してきた次世代育成に関する民族文化の伝統は、シニア・ボランティアたちの指導力の源泉として、見逃せない背景であるといえよう。

## 結び

学校という秩序空間に、一年生というカオスが適応していく過程をいかに支援できるのか、「触れ合いコープ」は、まさしくそうした目的をもつプログラムである。支援者であるシニアは、学校と子供たちとの間で、秩序とカオスがバランスをとる妥協点(カオスの縁)を、一年生に用意してあげる仲介者として、安定性、恒常性、そして柔軟性という、優れた素質をもつことが見出された。

子供支援のみならず、ボランティアをいかに支援し、育成するのは、システム作りの焦点といえるが、体系的な方法や系統だったマニュアルがあるわけではない。基

本的には、活動を通して、ボランティアたち自らがメカニズムを生み出す主体となっていくプロセスが確認された。ここで、システムの自己組織的な発展を促す要素をあげるとすると、ボランティア訓練の内容とも重なるのであるが、①「スキルの強化」と、②「目標の明確化と共有」という事項があげられよう。①は発達における幅の拡大、②は発達の方向性にあたるともいえる。この2つの次元に加え、特に触れ合いコープでその重要性が強調されていたのは、ティーゼが「愛と誠実さ」と呼ぶ情緒的作用である。この情的作用は、組織や個人の活動の原動力やエネルギーとして機能すると考えられるが、青少年支援研究で知られるJ.ローデスは、効果的な支援関係は、相互の信頼と、理解され、好かれ、尊重されると感じられるような結びつきによってアクティブになる、つまり、こうした絆なしには、効果的なダイナミクスは決して起らないであろうと論じている<sup>32)</sup>。青少年支援における情的作用の重要性は、一つの大きな研究テーマといえよう。

本論では、カウフマンの自己組織性の理論を参考にしたが、大きな理論であるため、十分に使いこなせなかった点が残念である。発達論や社会科学においてはシステム論の応用が進んでいる。学習や教育という分野に応用するためには、上述した情的作用などを含めて、より緻密な検討が求められよう。

## 注)

- 1) *Children's Defense Fund Yearbook 2000*.  
[www.childrensdefense.org/ss\\_child\\_abuse.html](http://www.childrensdefense.org/ss_child_abuse.html).
- 2) Freedman, M., *Towards Civic Renewal*, *The Journal of Gerontology Social Work*, Vol.28, No.3, 1997, pp.243-263.
- 3) 吉田里江「サービス・ラーニングの展開と子供NPO」『NPOの教育力と社会教育の公共性をめぐる総合的研究』東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画コース。2003. pp319-330.  
J. C. Kendal and Associates, *Combining Service and Learning*, A Resource Book for Community and Public Service Volume I, National Society for Internship and Experiential Education.  
*Intergenerational Service-Learning in Gerontology*, A Compendium Volume I, II, III, The Association for Gerontology in Higher Education, *Generations Together* University of Pittsburgh, 1998, 1999, 2000.
- 4) 佐藤一子『子どもが育つ地域社会』東京大学出版会, 2002, pp.194-197.

- 5) 拙稿「米国のボランティア活動を支えるシステムと教育・訓練-サポートセンターの事例から」『ボランティア・ネットワーク-生涯学習と市民社会』日本社会教育学会編, 東洋館出版, 1997, pp145-153, 拙稿「NPOを育てるNPOの役割」『NPOの教育力と社会教育の公共性をめぐる総合的研究』研究成果報告書.東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画コース, 2003, pp.309-318.
- 6) S.カウフマン著, 米沢富美子監訳『自己組織化と進化の論理』日本経済新聞社, 1999.
- 7) 同上書, p59.
- 8) Van Geert, P., Dynamic Systems Approaches and Modeling of Developmental Processes, In (ed.) J. Valsiner and K. Connolly, *Handbook of Developmental Psychology*, Sage Publication, 2003, pp.640-643.
- 9) Wilson, W.J., The Truly Disadvantaged : The Inner City, *The Under Class and Public Policy*, University of Chicago Press, Chicago, 1987.
- 10) Anderson, E., *Streetswise, Race Class and Change in an Urban Community*, University of Chicago Press. Chicago, 1990. p69.
- 11) 米国のデイケア施設はNPOや私立が多く, 施設に子供2人を預けた場合, 保育費は母親の給料に相当するといわれる。
- 12) Kaiser Family Foundation Survey, 1999. Kids and Media @ the new millenium.
- 13) Introducing Joining Together, *Joining Together*, 1 (1)1986.
- 14) Delaware Valley Intergenerational Network, *Inter change*, 1986, Spring, p.1.
- 15) Newman, S., A History of Intergenerational Programs, *Intergenerational Programs, Imperatives, Strategies, Impacts, Trends*, The Haworth Press, NY, 1989, pp.9-10
- 16) Newman, S., History and Evolution of Intergenerational Programs, In S., Newman (Eds.), *Intergenerational Programs : Past Present and Future*, Haworth Press, NY, 1997, pp.55-6.
- 17) Butts, D. M., and Kusano, A. T., Organizing at National Lebel: Lessons from the U.S.A. and Japan, In Kaplan,M., Henkin, N, and Kusano, A., *Linking Lifetimes*, University Press of America, 2002, pp.253-257.
- 18) www.gt.pitt.edu.
- 19) www.temple.edu.
- 20) Experience Corps, www.temple.edu.
- 21) Winston, L., Kaplan, M., Perlstein, S., and Tietze, R., Experience Corps, *Grandpartners*, Heinemann, Portsmouth, NH, 2001, pp.17-25.
- 22) 同上書, p26.
- 23) 同上書, pp.27-28.
- 24) 同上書, p29.
- 25) 同上書, pp.33-35.
- 26) 同上書, pp.36-37.
- 27) 同上書, pp.38-42.
- 28) 同上書, p43.
- 29) Gadsden, V. L., Intergenerational Discourses, Life Texts of African-American Mothers and Daughter, In *Handbook of Research in Teaching Literacy through the Communicative and Visual Arts*, ed., James Flood, Shirley B. Hearth, and Diane Lapp. Simon & Schuster, NewYork, 1997.
- 30) Washington, V., Bailey, U. J. O., *Project Head Start*, Garland Publishing, New York, 1995. E.シグラー&S.ムンチョウ著, 田中道治訳『アメリカの教育革命-ヘッドスタート・プロジェクトの偉大な挑戦』学苑社, 1994. 世代間ヘッドスタート・プログラムに関しては, www.gt.pitt.edu.
- 31) Winston, L., Kaplan, M., Perlstein, S., & Tietze, R., Experience Corps, *Grandpartners*, Heinemann, Portsmouth, NH, 2001. p44.
- 32) J. E. Rhodes, *Stand by Me*, The Risks and Rewards of Mentioning Joday's Youth, Harvard University Press, Cambridge, MA, 2002, pp.24-53.